

■独自の視点——こういう見かた、取り組み

文章を書く際に仮説を立てる。あたりまえのことなのに、残念ながらこれは、誰もがやっている方法ではないように思います。文章を書くということは、謎解きと同じだと思ってみてください。何か切実な問題を設定し、それを文章の中で解いてゆくということです。

日記は「自分とは何なのか。自分は何のために生まれてきて何をしたい人間なのか」という謎を解くために書くものとも言えますし、絶縁状を突きつけることは「この人と別れて本当に自分は幸せになれるのか」という仮説を確認するようなものです。

■「読ませる」ための7つのポイント

①自分の体験や見聞を挙げてみる

例えば参議院で郵政民営化についてもめていることを文章にしたいと思ったときに、「自分が小学校のときにはこうだった」と私的なことを書いてもかまいません。

②現在起きている例を3つ程度は挙げてみる

「小泉さんや中曽根さんは～というコメントをしている」などと、具体的な例を挙げてみることです。

③横軸としての比較

④縦軸としての歴史検征

戦前はどうかだったか、明治時代はどうかだったか、今起きていることが歴史的に特殊なことなのか、ヨソの人や組織や他国と比較して特殊なことなのかどうかを調べましょう。

⑤反論を想定する

自問自答と同じことです。なるべく意地悪な、あるいは本質的な反論を用意できるかどうか。要するに、自分の中に他者をどれだけ想定できるか、ということです。

⑥論点を整理する

靖国問題でしたら100個くらいはポイントがあるにしても、3点にまとめてみましょう。それ以外の細かいことは、全部その3点の中に入れてしまえばいいのです。

⑦できたら専門家の意見も取り入れてみる

①～⑦の視点を取り入れることによって、私的な文章を「読者をうならせる」文章に昇華させる通が大きく開かれるはずです。

京都大学の浅田彰さんに『構造と力』という本があります。その後日談的なエッセイに、「300冊の文献を読んでこの本を書いた」という趣旨の一文がありました。私はそのエッセイを28歳のころに読み、なるほどおと得心した。以来、私は「1テーマにつき最低本棚1本分」を目安としてきました。

1980年代後半、『別冊宝

島』はフリーライターの登竜門と言われており、私も書いてみたいと思ったことがあります。この本の最終ページを見ると、私と同年代か年上のライターが20人近く名を連ねていました。しかし、その中で今も活躍しているのはわずか2人しかいません。永江朗さんと、講談社ノンフィクション賞を取った岩上安身さんだけです。20年足らずでこうも淘汰が進むものかと、愕然としました。

100万円ばかりの原稿料や印税を毎月稼いで専業作家として自由に書きつつ家族を支えていくことは困難ですが（それくらいでは取材費や遊興費もろくに出ないという意味です）、別の職業をもっている人が文章で数万円の小遣いを稼ぐのは造作もないでしょう。

これは能力の問題ではなく、技術と目的と動機の問題です。